

経営情報研究
第13巻第1号(2005), 1-14ページ

研究論文

学生による授業評価と出席率との関係(1)

- 授業に出ていない学生は授業を悪く評価するのか? -

牧野 幸志

The Relationship between Student Ratings of Teaching and Class Attendance (1).

— Do the students who often skip a class underrate the class? —

Koshi MAKINO

【要約】本研究は、学生による授業評価と授業へ出席率との関係を検討した。先行研究に2つの改善を行った。第1に、出席を取らない授業を対象とした。第2に学生の出席は自己申告ではなく他者による客観的なデータを使用する工夫をした。次のような予測を行った。学生は、序盤の授業を受け、授業を高く評価し、満足できそうだと判断した場合には出席するようになり、逆に、序盤の授業で授業を低くし、満足できなさそうだと判断した場合に出席しなくなるだろう。したがって、出席率の非常に低い学生は、出席率の高い学生よりも授業を低く評価すると予想した。また、出席率と自己評価との関連も検討した。受講態度、学習態度の自己評価が高い学生は、もともと授業に対して真面目な態度をもっているため、授業にも出席するであろう。その結果、出席率の高い学生は自己評価も高くなるであろう。さらに、出席率と成績との関連も検討した。もともと授業に対して真面目な態度をもっている学生は、授業にも出席すると考えられる。そして、試験は授業内容から出題される。したがって、出席率の高い学生のほうが低い学生よりも成績が良いであろう。

調査の結果、授業にほとんど出席していない学生は他の学生よりも授業評価が低かった。また、満足度は授業にほぼ毎回出席している学生よりも低かった。次に、出席率の高い学生は出席率の低い学生よりも自己評価が高かった。さらに、出席率の高い学生ほど成績が良かった。これらは仮説を支持する結果であった。本研究により、授業に出ていない一部の学生は、授業を悪く評価することが明らかとなった。

キーワード：学生による授業評価，授業への出席率，学生の自己評価，成績。

1. 問題

近年,多くの大学でFaculty Development活動(教授団の能力開発,以下FDと表記)がさかに行われている。このFDの中でも特に「大学における授業評価」は既に広く普及している。大学における授業評価には大きく2つの柱があると考えられる。1つは,大学生が授業を評価する「学生による授業評価」である。学生による授業評価は,学期末に学生が受講した授業を評価する形で行われている。この授業評価は,もともと教員の教育活動の評価として重要視されてきた。しかし,最近では,授業評価の結果をその後の授業改善にどのように役立てていくかが議論されている。もう1つの柱は,「授業公開,授業参観」などの授業実践の分析と改善である。授業公開は,各大学においてある授業を公開し,その授業を他の教員たちが参観する形で行われている。参観後に意見交換会などを開催して,教員の教育実践力の向上を目指している。これは担当教員の評価というよりは,教育活動の向上を目的に行われている。本研究は,既に広く普及している学生による授業評価の信頼性に焦点を当てる。その理由は,学習者が教授者を評価する以上,その信頼性と妥当性が確保される必要があるからである。

既に学生による授業評価が広く普及している中で,依然として教員からは授業評価の信頼性に疑問が投げかけられている。授業評価の信頼性については,授業評価に影響を与える要因の検討を含め,さまざまな観点から検討されている(井上,1993;牧野,2001a,2001b,2001c,2002a,2002b,2002c,2002d,2003a,2003b,2004;松田・三宅・谷村・小嶋,1999;南・松尾,2000;三宅,1999;西浦・牧野,2002;大槻,1993;大山,2001;住田,1996;安岡・峯崎・山本・高野・香取・光澤,1997;安岡・峯崎・山本・高野・光澤・香取,1995;安岡・高野・成嶋・光澤,1986a,1986b;安岡・吉川・高野・峯崎・成嶋・光澤・道下・香取,1989a,1989b)。例えば,授業評価は,開講曜日により評価が変わる,開講時限により評価が変わる(安岡他,1989a)。他には,教員の年齢が下がるほど評価が高く(安岡他,1997;安岡他,1995),職階が下がるほど評価が高い(安岡他,1995;安岡他,1989a)ことが明らかとなっている。さらに,評価の実施時期により異なることも報告されている(益田,1996)。

1.1. 学生による授業評価の信頼性

学生による授業評価に対して,教員から反対の意見が出される理由の1つに,評価の信頼性の問題がある。受講している学生が正確に授業を評価しているかが問題となる。例えば,学生は,後に自分たちの成績評価を行う教員への評価懸念から実際以上に高く評価するのではないかと,あるいは,学生が授業評価に関心がなくいいかげんな評価をするのではないかなどの疑問が出てくる。学生の教員への評価懸念に関して,牧野(2003a)は,評価用紙に記名することが授業評価に与える影響を検討した。記名することにより,自分の評価が授業担当者知られることを恐れ,無記名式よりも高く評価すると予想された。しかしながら,結果は,記名式の評価と無記名式の評価の間に差はみられなかった。また,牧野(2003b,2004)は,授業担当者への評価懸念を操作して実験を行った。その結果,授業担当者への評価懸念がある場合(記名式で実施者が授業担当者)にも,ない場合(無記名式で実施者が授業担当者以外)にも授業評価に差はみられなかった。評価懸念が高い場合にも実際の評価よりも高く評価することはなかった。ただし,

学生による授業評価と出席率との関係(1)

牧野(2003a, 2003b, 2004)の対象となった授業はすべて無記名式の評価が既に非常に高かったため、天井効果がみられた可能性はある。

その他に、学生による授業評価の信頼性に疑いをもたらす要因に授業への出席率がある。授業に一度も出席していない学生は評価を行うことが出来ないはずであり、「授業に出ていない学生はいいかげんな評価をするのではないか」という疑問が出てくるのも当然であろう。大学における授業では、出欠確認の有無は担当教員の自由であり、出欠の取り方も多種多様である。毎回点呼により出席を取る授業から全く出席を取らない授業までがある。科目別にみると、必修科目では出席を取ることが多く、教養の選択科目では取らないことが多い。また、受講生数別にみると、少人数クラスでは出席を取る(取れる)が大人数クラスでは取らない(取れない)ことが多い。近年では、学生の管理という観点から、出席カードなどの提出により出席を確認する方法が一般的であろう。それでは、大学生の授業への出席率と授業評価との間にはどのような関係があるのであろうか。出席率の非常に低い学生、つまり、授業に出ていない学生は、出席率の高い学生に比べて、授業を悪く評価するのであろうか。

1.2. 学生による授業評価と出席率

授業評価と出席との関係について、冷水(2003)は2つのクラスを対象として授業評価を行い、それらの関連を検討している。1つのクラスは、教職必修科目である「教育心理学」であり、出席カードにより出席をとっていた。このクラスにおいては、約85%の学生がほとんど毎回出席していた。ただし、これは自己申告制による出席結果である。「ほとんど毎回出席していた学生」に「半分以上出席していた学生」を合わせると全体の約96%を占めていたため、出席率の違いによる学生の分類が困難であった。出席率と授業評価との相関分析を行った結果、有意な相関は全くみられなかった。

もう1つのクラスは、教養の選択科目である「心理学」であり、出席はとられていなかった。このクラスでは、自己申告の出席によると約50%の学生がほぼ毎回出席していた。この出席率を基に受講生を「ほとんど毎回出席」、「半分以上出席」、「半分以下出席」、「ほとんど欠席」の4群に分け、授業評価が異なるかを検討した。その結果、満足度において、「ほとんど毎回出席」した学生は「半分以下出席」した学生よりも満足度が高かった。ただし、出席率のより低い「ほとんど欠席」していた学生との間に差はみられなかった。これについて、冷水(2003)は、満足できる授業なら出席するようになると考察しているが、「ほとんど欠席」の学生と「ほとんど毎回出席」の学生との間に差がみられないのには疑問が残る。また、出席率と授業評価との相関分析の結果、出席率は、満足度、教員の言動、授業の機器使用と弱い正の相関がみられた。これらは、教員、授業方法を高く評価して、授業に満足している学生が進んで出席したと考察している(冷水, 2003)。

冷水(2003)の「教育心理学」の授業評価では、出席を取ることを学生に通知した結果、自己報告によると約85%の学生がほとんど毎回出席していた。このような場合、出席率が非常に高まり、出席率にばらつきがみられず、授業評価との関連を検討するのが困難である。また、出席率による差がみられたとしてもそれは自主的な出席とはいえない。したがって、出席を取らな

い授業において出席率と授業評価との関連をみる必要があるだろう。また、冷水(2003)の2つの授業での出席データはいずれも自己報告式であり、虚偽の報告を行う可能性がある。したがって、その信憑性に多少の問題が残る。これらのことから、出席率と授業評価との関係を検討する際には、1)出席を取らない授業を対象とすること、2)客観的な出席データを使用して分析を行うことの2点が必要である。こうすることで自主的な出席と授業評価との関係が明らかとなるであろう。

1.3. 本研究の問題と目的

本研究では、授業評価の信頼性に影響を与える要因の中から、授業への出席率を取り上げる。特に自主的な出席と授業評価との関係を検討する。現在、大学では出席カードの提出などの方法で講義期間中に何度か出席を取ることが一般的であり、講義科目において毎回、不正なく出席が取られることは稀であろう。出席を取らない授業において、出席率の非常に低い学生、つまり、授業にほとんど出ていない学生は、出席率の高い学生に比べて、授業を低く評価するのであろうか。冷水(2003)の結果から次のような仮説を立てた。まず、学生は序盤の授業を受けて、授業を面白い、満足できそうだと判断した場合、出席するようになり、その結果、出席率が高い学生は授業を高く評価するのであろう。逆に、最初に面白くない、満足できないと判断した場合、授業に出席しなくなり、その結果、授業を低く評価するのであろう。つまり、出席率の低い学生は、高い学生よりも授業を低く評価すると予想される。

次に、学生の自己評価と出席率との関係を検討する。先行研究の多くでは、出席率も1つの自己評価として報告させていた(牧野, 2001a, 2001b, 2002b, 2002c; 冷水, 2003)。しかしながら、本研究では出席率を正確に測定し、この出席率と自己報告による自己評価との関連を検討する。授業に対して真面目な態度を持っている学生が自主的に出席すると考えられるため、出席率の高い学生は自己評価も高いと予想される。逆に、授業に対して不真面目な学生は出席しないと考えられるため、出席率の低い学生は自己評価も低いと予想される。また、自己評価の受講態度項目には、まじめに出席したかなどの項目もあるため、学生が自分の評価を正確に行っているかを知ることができる。さらに、出席率と成績評価との関係も検討する。もともと授業に対して真面目な態度をもっている学生は、授業にも出席すると思われる。そして、大学の試験では、授業で学んだ内容が試験に出題されることが多い。したがって、授業への出席率の高い学生は低い学生よりも成績評価が高いと予想される。

2. 方法

2.1. 対象授業と被調査者

大阪府内の私立大学の平成16年度教養科目2クラス(全学年対象)を対象とし、その受講生を被調査者とした。授業の開講時期は、毎週月曜日3校時(13:00~14:30)と毎週金曜日2校時(10:40~12:10)であった。2つのクラスは同一科目であり授業内容も担当教員も同一であったが、学部によりクラスが分けられていた。担当教員は、30代の男性であり、教育歴は4年6ヶ月であった。講義は、パソコンの画面をスクリーンに映し出し、教科書を用いて行われた。出

学生による授業評価と出席率との関係(1)

席はとられていなかった。受講登録者数は126名であったが、被調査者は93名(男性57名、女性36名)であった。

2.2. 調査用紙の構成

学生による授業評価 牧野(2001a, 2002b, 2003a), 松田他(1999), 西浦・牧野(2002)を参考に作成された授業評価簡易版(牧野, 2005)を使用した(13項目)。評価内容は、(1)授業内容(5項目)、(2)担当教員(5項目)、(3)授業方法(3項目)であった(詳しい項目は付録A - 1参照)。それぞれの評価項目に対して、「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の5段階で評定を求めた(1～5点)。各授業評価の項目の平均得点を授業評価得点とした(1～5点)。得点が高いほど評価が高いことを示す。

授業の総合評価と満足度 各授業評価を考慮して、対象授業の総合評価、満足度(各1項目)に対してそれぞれ、「非常に悪い」～「非常に良い」、「非常に不満」～「非常に満足」の5段階で評定を求めた(1～5点)。得点が高いほど評価が高いことを示す。

学生による自己評価 牧野(2004, 2005)と同様の自己評価項目(受講態度5項目、学習態度5項目計10項目)を使用した(詳しい項目は付録A - 2参照)。学生の自己評価に対する項目に対して、「まったくあてはまらない」～「非常にあてはまる」の5段階で評定を求めた(1～5点)。得点が高いほど授業における自己評価が高いことを示す。

2.3. 調査手続きと出席確認

平成17年1月の試験期間中の当該授業の試験日に授業評価を行った。調査は、授業担当者からのアンケートという形で記名式で行われた。試験の開始直前の約10分を用いておこなわれた。したがって、授業評価実施時点においては、学生は試験を受けていない。

出席の確認は、授業中に担当教員が質問したことに対して回答を記入する「授業カード」の提出により確認した。当該授業では、初回のオリエンテーションで「出席を取らないこと」が告げられた。また、同時に、授業に参加する学生は「授業カード」を記入し、提出するよう求めた。ただし、「授業カード」の提出は単位認定には一切関係しないことを強調した。実際、「授業カード」の提出は成績評価には一切考慮しなかった。2クラス合計の受講登録者数は126名であったが、実際の授業参加者は約80名であった。参加者のほぼ全員が「授業カード」を提出していた。また、「授業カード」は毎回、授業中に出される5～7つの質問に対する回答の記入が必要であり、他者のものを偽装することは不可能である。

3. 結果

3.1. 学生による授業評価と学生の自己評価

対象となった授業の評価をTable 1に示した。授業内容評価、担当教員評価、授業方法評価は、それぞれ4.31, 4.22, 4.26(5点満点)であり比較的高い評価であった。また、授業の総合評価と満足度は、それぞれ4.43, 4.35であり比較的高かった。自己評価は、受講態度、学習態度がそれぞれ4.54, 4.13と高かった。特に「私語をしなかった」、「居眠りをしなかった」などの受

Table 1 学生による授業評価, 自己評価, 試験得点の平均値と標準偏差

評価項目	平均点 (標準偏差)
授業評価 ^{a)}	
内容	4.31 (0.46)
教員	4.22 (0.61)
方法	4.26 (0.57)
総合評価 ^{a)}	4.43 (0.68)
満足度 ^{a)}	4.35 (0.68)
自己評価 ^{a)}	
受講態度	4.54 (0.43)
学習態度	4.13 (0.62)
試験得点 ^{b)}	67.35 (20.62)

$N=93$

^{a)} 表中の平均値は1～5の値をとりうる(3が「どちらともいえない」に相当)。得点が高いほど評価が高いことを示す。()内の数値は標準偏差を示す。

^{b)} 表中の数値は試験の平均得点を示す(100点満点)。

講態度については非常に高かった。試験の平均得点は、67.35点(100点満点)であり、比較的易しい試験問題であった。

3.2. 学生による授業評価と出席率との関係

3.2.1. 出席率による授業評価の差異

学生の授業への出席率により授業評価が異なるかを検討した。まず、被調査者である学生を出席率により3群に分類した。授業カードの提出回数を基に、12回の授業のうち欠席が0回または1回の学生を出席率高群($N=32$)、欠席回数が2～7回の学生を出席率中群($N=50$)、欠席回数が8回以上の学生を出席率低群($N=11$)とした。この出席率の要因を独立変数とする1要因3水準の分散分析を行った(Table 2)。従属変数は、各授業評価因子、総合評価、満足度であった。

授業内容 授業内容評価得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意でなかった($F(2, 90)=2.57, n.s.$)。出席率によって、授業内容の評価に違いはみられなかった。

担当教員 担当教員評価得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意であった($F(2, 90)=8.39, p<.05$)。多重比較の結果、出席率高群($M=4.41$)と出席率中群($M=4.23$)は、出席率低群($M=3.60$)よりも教員評価が高かった。3分の2以上を欠席している低群は、他の群よりも担当教員の評価が低かった。

授業方法 授業方法評価得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意

学生による授業評価と出席率との関係(1)

Table 2 出席率による授業評価の差異

出席率	低群(L) N = 11	中群(M) N = 50	高群(H) N = 32	多重比較 ^{b)}
授業評価 ^{a)}				
内容	4.05 (0.59)	4.31 (0.45)	4.41 (0.38)	n. s.
教員	3.60 (0.76)	4.23 (0.57)	4.41 (0.45)	L < M, H
方法	3.79 (0.57)	4.27 (0.56)	4.41 (0.49)	L < M, H
総合評価 ^{a)}	3.82 (1.03)	4.44 (0.61)	4.63 (0.48)	L < M, H
満足度 ^{a)}	3.91 (1.08)	4.32 (0.61)	4.56 (0.50)	L < H

^{a)} 表中の数値は平均値を示す。平均値は1～5の値をとりうる(3が「どちらともいえない」に相当)。得点が高いほど評価が高いことを示す。()内の数値は標準偏差を示す。

^{b)} 出席率を要因とする1要因3水準の分散分析の多重比較の結果を示す。大小関係を不等号で示す。

であった($F(2, 90)=5.25, p<.05$)。多重比較の結果、出席率高群($M=4.41$)と出席率中群($M=4.27$)は、出席率低群($M=3.79$)よりも授業方法評価が高かった。3分の2以上を欠席している低群は、他の群よりも授業方法を低く評価していた。

総合評価 総合評価得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意であった($F(2, 90)=6.41, p<.05$)。多重比較の結果、出席率高群($M=4.63$)と出席率中群($M=4.44$)は、出席率低群($M=3.82$)よりも授業の総合評価が高かった。3分の2以上を欠席している低群は、他の群よりも総合的に授業を低く評価していた。

授業への満足度 満足度得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意であった($F(2, 90)=4.11, p<.05$)。多重比較の結果、出席率高群($M=4.56$)は、出席率低群($M=3.91$)よりも授業への満足度が高かった。3分の2以上を欠席している低群は、ほぼ毎回出席していた高群に比べて、満足度が低かった。

3.2.2 出席率と授業評価との相関関係

学生の授業への出席率と各授業評価、総合評価、満足度との関連を検討するため、相関係数を算出した(Table 3)。その結果、出席率と授業の内容評価との間に有意な相関はみられなかったが、出席率と授業方法評価、総合評価、満足度との間に弱い正の相関がみられた。出席率が高いほど評価が高かった。また、出席率と教員評価との間に比較的強い正の相関がみられた。

Table 3 出席率と授業評価、成績との相関関係^{a)}

	授業評価			総合評価	満足度	成績得点
	内容評価	教員評価	方法評価			
出席率	.258	.415 *	.275 *	.389 *	.315 *	.590 *

^{a)} 表中の数値は r (相関係数)を示す。

$N=93, p<.05$

3.3. 学生の自己評価, 成績と出席率との関係

3.3.1. 出席率による自己評価の差異

授業への出席率により学生の自己評価が異なるかを検討した。授業カードの提出回数を基に、被調査者を出席率高群(欠席0回or1回, $N=32$), 出席率中群(欠席2~7回, $N=50$)と出席率低群(欠席8回以上, $N=11$)の3群に分類した。この出席率の要因を独立変数とする1要因3水準の分散分析を行った(Table 4)。従属変数は、自己評価の2因子(受講態度評価, 学習態度評価)であった。

受講態度評価 受講態度評価得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意であった($F(2, 90)=9.65, p<.05$)。多重比較の結果、出席率高群($M=4.73$)は中群($M=4.52$), 低群($M=4.13$)よりも評価が高く、中群($M=4.52$)は低群($M=4.13$)よりも評価が高かった。出席率の低い学生ほど、受講態度が悪かった。

学習態度評価 学習態度評価得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意であった($F(2, 90)=4.20, p<.05$)。多重比較の結果、出席率高群($M=4.28$)は低群($M=3.67$)よりも評価が高かった。出席率の低い学生は、出席率の高い学生に比べて学習態度が悪かった。

3.3.2. 出席率による成績評価の差異

授業への出席率により学生の成績評価が異なるかを検討した。授業カードの提出回数を基に、被調査者を出席率高群(欠席0回or1回, $N=32$), 出席率中群(欠席2~7回, $N=50$)と出席率低群(欠席8回以上, $N=11$)の3群に分類した。この出席率の要因を独立変数とする1要因3水準の分散分析を行った(Table 4)。従属変数は、試験の成績得点(100点満点)であった。

成績評価 成績評価得点に対して、出席率による分散分析を行った結果、条件差は有意であった($F(2, 90)=14.94, p<.05$)。多重比較の結果、出席率高群($M=77.53$)は中群($M=66.18$), 低群($M=43.09$)よりも成績得点が高く、中群($M=66.18$)は低群($M=43.09$)よりも受講態度の自己評価が高かった。出席率の高い学生ほど、成績が良かった。

また、出席率と成績評価との間の相関係数を算出した(Table 3)。その結果、出席率と成績得点の間には、有意な比較的強い正の相関がみられた($r=.590$)。つまり、出席する回数が増えるほど、成績得点は高かった。

Table 4 出席率による自己評価, 試験得点の差異

出席率	低群(L) $N=11$	中群(M) $N=50$	高群(H) $N=32$	多重比較 ^{c)}
自己評価 ^{a)}				
受講態度	4.13 (0.51)	4.52 (0.43)	4.73 (0.27)	L < M < H
学習態度	3.67 (1.07)	4.14 (0.52)	4.28 (0.46)	L < H
試験得点 ^{b)}	43.09 (18.91)	66.18 (20.02)	77.53 (13.37)	L < M < H

^{a)} 表中の数値は平均値を示す。平均値は1~5の値をとりうる(3が「どちらともいえない」に相当)。得点が高いほど評価が高いことを示す。()内の数値は標準偏差を示す。

^{b)} 表中の数値は試験の平均得点を示す(100点満点)。

^{c)} 出席率を要因とする1要因3水準の分散分析の多重比較の結果を示す。大小関係を不等号で示す。

4. 考察

本研究の目的は、学生の授業への出席率により授業評価が異なるのかを調べ、授業に出ていない学生は授業を不当に低く評価するかを検討することであった。次に、出席率による自己評価の違い、出席率による成績の違いを検討した。出席率の高い学生は、低い学生に比べて授業評価が高いと予想した。また、授業に出席する学生は、授業に対してもまじめな態度を持っている学生であり、自己評価も高いと予想した。さらに、授業に出席している学生のほうが出席していない学生よりも成績が良いと予想した。

4.1. 対象となった授業の評価と学生の出席率

本研究で対象となった2つのクラスはいずれも同じ教員が同様の方法、内容で授業を行っていた。授業評価は、総合評価が4.43、満足度が4.35と比較的高かった。このことから全体として対象授業の評価は高く、受講生が授業に満足していたことがわかる。また、自己評価の受講態度は4.54と非常に高かった。これは、対象となった授業で初回のオリエンテーションにて、授業の方法、ルールなどについて詳細に説明があった結果であると思われる。学習態度も4.13と比較的高かった。成績評価も、100点満点において67.35点と比較的高かった。これは、対象となった授業ではいずれも出席をとっていなかったが、試験を受けた学生の中の約30%はほぼ毎回出席しており、授業には出席せず試験のみを受けた学生がごく少数であったためと思われる。

対象となった授業の登録者数は126名であった。このうち、試験を受験した学生は93名であった。したがって、3割近くの学生が途中で受講を取りやめていた。毎回の授業参加者は各クラス40名程度で計約80名であった。学生の出席率を調査した結果、平均の欠席回数は3.48回であり、全体として出席率は高かった。12回行われた授業の個々の出席率を見てみると、欠席が0回あるいは1回である学生は32名(34.4%)であった。欠席が2～7回の学生が50名(53.8%)であり、その中では2回あるいは3回欠席した学生が27名(30.0%)で最も多かった。したがって、欠席が3回以下の学生は64.4%ということになる。欠席が8回以上の学生は11名(11.8%)であり、そのうち一度も授業に出ていない学生は2名であった。これらの結果から、対象となった授業の出席率は、授業登録のみを行った学生を除いて高かったといえる。

4.2. 学生による授業評価と出席率との関係

学生の授業への出席率により授業評価が異なるかを検討した。その結果、授業の総合評価において、授業への出席率が高かった学生とある程度高かった学生は、ほとんど授業を受けていない出席率の低い学生に比べて、授業を高く評価していた。ほぼ毎回出席していた学生による授業評価を公正な評価と考え、授業にほとんど出席していない学生は授業を不当に低く評価していた。つまり、授業にほとんど出席していない一部の学生の評価は、まじめに出席している学生よりも低いことが明らかとなった。授業評価の中でも教員と授業方法の評価において、同様の結果がみられた。つまり、出席率の低い学生は、教員の態度や信頼性、授業方法を低く評価していた。対象となった授業では、遅刻、授業中の私語、居眠りを一切認めないことを初

回に説明したため、この授業方法を不服に思い、その担当者も嫌いになったと考えられる。その結果、普通の授業には出席しなかったのかもしれない。また、授業への満足度については、出席率が高かった学生は、出席率の低かった学生よりも満足度が高かった。ほぼ毎回授業に出ている学生は、授業にほとんど出ていない学生よりも授業に満足していた。これらの結果は、仮説を支持するものであった。序盤の授業を受け、授業を高く評価し満足できそうだと判断した学生は、その後も授業に出席し、逆に、序盤に授業を低く評価し満足できないと判断した学生は出席しなかったため、このような結果が現れたと考えられる。また、相関分析においても、出席率と授業評価、満足度の間に正の相関がみられた。これも、出席率の高い人ほど授業を高く評価するというよりは、最初に授業を高く評価した、あるいは、授業に満足していた学生ほど授業に出席したということを示している。

4.3. 学生の自己評価、成績と出席率との関係

授業への出席率により学生の自己評価が異なるかを検討した。自己評価は、「授業には、まじめに出席した」、「授業中、私語をしなかった」などの受講態度評価と「授業に意欲的に取り組んだ」、「授業中は集中していた」などの学習態度評価の2つの側面から検討した。受講態度については、出席率が高い学生ほど自己評価が高いことが明らかとなった。つまり、出席率の高い学生は、そうでない学生に比べて、授業中の態度も良かった。受講態度評価には、出席に関する自己報告項目も含まれていたため、出席率の非常に低かった学生も正直に回答していることも明らかとなった。この結果は、もともと授業に対してまじめな態度を持っている学生は出席し、まじめに授業を受けていたことを示している。他方、学習態度評価については、出席率の非常に高い学生は、出席率の非常に低い学生に比べて自己評価が高かった。つまり、ほぼ毎回授業に出席していた学生は、ほとんど授業に出席していない学生よりも、意欲的に学習していた。この結果も、もともと授業に対して真面目な態度を持っている学生は、意欲的に学習していることを示している。このことが、出席率による成績評価の違いにも出ている。

次に、授業への出席率により試験の成績が異なるかを検討した。その結果、出席率の高い学生ほど成績得点が高かった。つまり、出席率が高いほど成績が良かった。これには2つの理由が考えられる。1つは、授業に対して真面目な受講態度、学習態度を持っている学生の出席率が高かったこと。もう1つは、試験問題が授業の内容から出題されていたことである。もともと授業に対する真面目な態度を持っている学生が、授業に出席し、真面目に学習した結果、試験成績が良かったと考えられる。

4.4. まとめと今後の課題

本研究から次の知見が得られた。まず、授業にほとんど出席していない一部の学生は、他の学生に比べて授業を低く評価する。ただし、これらの学生の割合は全体の約10%であり、全体に及ぼす影響は小さかった。また、比較的多くの回数(2~7回)休んでいる学生においても、授業評価は、ほぼ毎回出席している学生と異ならなかった。次に、出席率の非常に低い学生は、自己評価も低かった。さらに、出席率が高い学生ほど成績が良いことが明らかとなった。こ

学生による授業評価と出席率との関係(1)

これは、授業に対してもともと真面目な態度を持っている学生の出席率が高く、真面目な受講態度、意欲的な学習が良い成績につながったと考えられる。このことは、学生が自主的に授業へ出席し、意欲的に学習を行えば、成績が伸びる可能性を示唆している。授業への強制的な参加ではこのような結果は期待できないであろう。なぜなら、出席確認を行うから授業に出席するという場合には、出席はするが学習意欲は全くないという可能性が高いからである。

今後の課題として、学生の自主的な出席への動機づけと学習への動機づけの検討があげられる。本研究においても、126名の登録者のうち約50名は全く来ないか、序盤の授業から出席しなくなった。ところが、残った学生のうちの約30%の学生はほぼ毎回出席していた。これらはただ単に個人の性格によるものなのか、それとも、授業内容によるものなのか、あるいは、他に原因があるのかを検討する必要がある。また、大学の授業では自主的に出席しても学習への動機づけが低い学生も存在する。これらの学生は授業に出席はしているが、学習への意欲が低いため、学習効果は期待できないであろう。したがって、大学の授業における学習への動機づけを高める要因を検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 井上正明 1993 学生による授業評価の方法論的考察 大学の授業評価に関する実証的研究(8) 福岡教育大学紀要, **42**, 277-291.
- 牧野幸志 2001a 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 教養選択科目「社会心理学」の場合 高松大学紀要, **35**, 1-16.
- 牧野幸志 2001b 学生による授業評価と自己評価, 成績, 及び学生の満足感との関係 専門必修科目「人間関係論」の場合 高松大学紀要, **35**, 17-31.
- 牧野幸志 2001c 学生による授業評価の規定因の検討(1) 多変量解析を用いた因果モデルの検討 高松大学紀要, **36**, 55-66.
- 牧野幸志 2002a 学生による授業評価と自己評価との関連 ゲストスピーカーによる1回限りの講義を対象として 高松大学紀要, **37**, 83-92.
- 牧野幸志 2002b 学生による授業評価, 満足感と成績との関係 成績の悪い学生は本当に授業を酷評するのか? 高松大学紀要, **38**, 35-47.
- 牧野幸志 2002c 学生による授業評価, 満足感と単位修得との関係 単位不認定の学生は, 授業に不満を抱くのか? 高松大学紀要, **38**, 49-61.
- 牧野幸志 2002d 学生による授業評価の規定因の検討(2) 成績の判定基準が授業評価に与える影響 高松大学紀要, **38**, 63-71.
- 牧野幸志 2003a 学生による授業評価の規定因の検討(3) 記名式による調査が授業評価に与える影響 高松大学紀要, **40**, 63-75.
- 牧野幸志 2003b 評価懸念が学生による授業評価に与える影響(1) 授業担当者への評価懸念のない場合 高松大学紀要, **40**, 77-87.
- 牧野幸志 2004 評価懸念が学生による授業評価に与える影響(2) 授業担当者への評価懸

- 念のある場合 高松大学紀要, **41**, 75-85.
- 牧野幸志 2005 学生による授業評価の規定因の検討(4) - 授業概要の認知度が授業評価に与える影響 - 経営情報研究, **12(2)**, 1-20.
- 松田文子・三宅幹子・谷村 亮・小嶋佳子 1999 学生による授業評価と自己評価, 授業選択態度, 及び成績の関係 教職必修科目「生徒指導論」の場合 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), **48**, 121-130.
- 益田良子 1996 学生による授業評価の試み 実施時期による検討 日本心理学会第60回大会発表論文集, 408.
- 南 学・松尾浩一郎 2000 単位の認定・不認定が授業評価に与える影響 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 384.
- 三宅幹子 1999 大学生における授業選択態度のタイプと授業評価, 自己評価, 及び成績の関係 広島大学教育学部紀要 第一部(心理学), **48**, 141-148.
- 西浦和樹・牧野幸志 2002 教師の実践的力量向上のための授業改善の試み 学生による授業評価の要因分析 日本教育工学会誌, **26**, 197-200.
- 大槻 博 1993 多摩大学の学生による授業評価「ボイス」をめぐる考察 一般教育学会誌, **15**, 47-49.
- 大山泰宏 2001 大学教育評価の課題と展望 京都大学高等教育研究, **7**, 37-55.
- 冷水啓子 2003 学生による授業評価() - 科目分類, 学年, 出席状況による結果の相違 - 桃山学院大学社会学論集, **36(2)**, 125-152.
- 住田幸次郎 1996 学生による「授業評価」に関する数量的分析 ノートルダム女子大学研究紀要, **26**, 23-40.
- 安岡高志・峯崎俊哉・山本銀次・高野二郎・香取草之助・光澤舜明 1997 学生の授業評価におよぼす教員の年齢の影響 大学教育学会誌, **19**, 75-79.
- 安岡高志・峯崎俊哉・山本銀次・高野二郎・光澤舜明・香取草之助 1995 東海大学における1993年度前期授業評価の実施結果 授業評価の性質 一般教育学会誌, **17**, 104-109.
- 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光澤舜明 1986a 学生による講義評価 一般教育学会誌, **8(1)**, 46-59.
- 安岡高志・高野二郎・成嶋 弘・光澤舜明 1986b 学生による講義評価 一般教育学会誌, **8(2)**, 50-60.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989a 学生による講義評価 学生の質と講義評価の関係について 一般教育学会誌, **11**, 56-59.
- 安岡高志・吉川政夫・高野二郎・峯崎俊哉・成嶋 弘・光澤舜明・道下忠行・香取草之助 1989b 学生による講義評価 成績と講義評価の関係 一般教育学会誌, **11**, 99-102.

学生による授業評価と出席率との関係(1)

付録A - 1

学生による授業評価アンケート

このアンケートは、今後の授業をより充実したものにするためのものです。授業に対する以下の質問にご回答ください。その後、この授業に対するあなた自身の学習態度についてご回答ください。調査の結果はすべて統計的に処理され、個人の回答の結果が公開されることは絶対にありませんので、正直にお答えください。このアンケートへの回答は成績には一切関係しません。ご協力お願いいたします。

調査実施日 ()年 ()月 ()日 ()曜日 ()時限目
 授業科目名 () 担当教員(教官)名 () 教員(教官)
 学籍番号 () 名前 () 年齢 ()歳 性別(男・女)

(回答例) 以下の例を参考に、最もあてはまるところに「 」をつけてください。

例 私は、決断が早い方である 

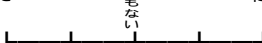
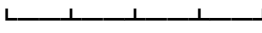
この授業についてお尋ねします。以下の各質問項目に対してあなたの考えに最もよくあてはまるもの1つに○をつけてください。

	まったくそう思わない	あまりそう思わない	どちらでもない	ややそう思う	非常にそう思う
授業内容について					
1. 授業内容は、わかりやすかった					
2. 授業内容は、興味を持てるものだった					
3. 授業内容は、将来、役立つものであった					
4. 授業内容は、新鮮なものであった					
5. 授業内容は、専門性が高かった					

	非常に悪い	やや悪い	どちらでもない	やや良い	非常に良い
担当教員(教官)について					
6. 教育に対する熱意が感じられた					
7. 担当教員(教官)に親しみがもてた					
8. 担当教員(教官)は信頼できた					
9. 学生の意見や質問に十分に答えていた					
10. 私語を注意するなど、教室内は静かに保たれていた					

	非常に悪い	やや悪い	どちらでもない	やや良い	非常に良い
授業形態、授業方法について					
11. テキストや配布資料は、わかりやすかった					
12. 黒板(あるいはホワイトボード)や視聴覚教材(OHP, スライド, ビデオなど)が効果的に使われていた。					
13. 授業の始まりが遅れたり、授業が早く終ることが多かった					

以上の内容を考慮し、この授業の総合評価とこの授業への満足度を判定してください。

14. この授業の総合的な評価は？	悪い		良い
15. この授業にどの程度満足していますか？	不満		満足

裏へ進んでください。

